

## ふるさと名所紀行

祖母山と  
ウガヤフキアエズ王朝

昭和32年 飛田川出身 藤島 寛高

みなさんは、祖母山の麓にある  
神原地区をご存知でしょうか？ここに「健男霜凝日子神社」と  
いう立派な神社があります。通称「穴森神社」または「神  
原神社」とも呼ばれていますが、  
実は、ここは謎だらけの、不可解  
な神社なのです。

## この神社をめぐる謎

それは、そこに祀られている  
神様と社殿の配置を見ていただ  
ければ分ります。

## 謎1 遙拝所

まず、神原溪谷のほとりにあ  
る一番立派なお社ですが、実は  
ここは「遙拝所」なのです。つまり、神様を拝むための集  
会所であり、そのご祭神は「健  
男霜凝日子」と書かれていま  
す。タケオシモコリヒコとは一  
体誰なのでしょう？ 少なく  
とも神話にはあまり登場してき

ませんよねえ。

さらに、神様を拝む方角は祖  
母山の山頂を指していません。  
一体誰を拝むための施設なの  
でしょうか？

拝殿

## 謎2 下宮

この遙拝所から、さらに西に  
約600mほど行くと、険しい  
崖の中腹に「下宮」があります。  
ここは地元の人以外は、ほとん  
ど知らないと思います。しかも、その入り口には「姥  
嶺稲荷」と書かれているので、

下宮

誰もがお稲荷さんかと思ってい  
まうのですが、実は看板の裏側  
ものぞいてみてください。そこ  
には「豊玉姫」と「彦五瀬命」  
の名前があります。この人たちは  
一体誰なのでしょう？ し  
かも、なぜ裏側に書く必要があ  
ったのでしょうか？険しい石段を上り詰めると、  
そこに大きな洞窟があり、その  
横穴にすっぽりと収まるように  
朱塗りの立派な社殿があります。  
『直入郡志』には「白雉  
二年（651年）飛鳥時代の創  
建」だと書かれています。一体  
誰が、何のために？ このお社  
を建てたのでしょうか？

## 謎3 中宮

ここは、通称「穴森神社」と  
呼ばれているので、ご存知の方  
も多いと思います。

江戸時代に中川の殿様が洞窟

の水を抜いて、そこから竜の骨  
が出てきたという伝説で有名な  
場所です。ところが、ここのご祭神は  
「祖母山大明神」となっていま  
す。緒方三郎惟栄も信仰してい  
たというこの竜神様とは、いつ  
たい誰なのでしょう？

## 謎4 上宮

祖母山の山頂には、石の祠が  
あって、そこに祀られているの  
は「高千穂大明神」です。この「高千穂大明神」と「祖  
母山大明神」は、違う神様なの  
でしょうか？さてさて、このあたりで大混  
乱してきませんか？なぜ、「上宮」「中宮」「下宮」  
と「遙拝所」で、それぞれ違う  
神様が祀られているのしょう  
か？ まるで、何かを悟られな  
いために、わざと隠している  
かと思えません。そこには、私たち竹田市出身  
者さえも知らない、深い深い秘  
密があったのです。明治政府は豊玉姫を  
嫌っていた？もともと、この場所に祀られ  
ていたのは「豊玉姫」という女  
神様とその一族だったのです。この「豊玉姫」こそ、実は日  
本人のルーツであり、天皇家のご先祖様であり、姥嶺大明神で  
あり、蛇神様と呼ばれた大蛇の  
化身であり、さらに竜宮城から  
やってきた半魚人だったのです。明治13年、この神社を「国弊  
社」（国立神社）に昇格させよ  
うという動きが盛り上がり、立  
派な社殿も整備されましたが、  
当時の教部大輔は、この申請を  
あっさり却下します。しかも、この申請を通すため  
に、あえてご祭神を「タケオシ  
モコリヒコ」に変更したとい  
うのです。「そうしないと申請が  
通りにくかったから」と、地元  
の人が証言しています。言いかえれば、「豊玉姫」と  
その一族は、明治政府から敬遠  
されていたのではないかとい  
うことです。「豊玉姫」だけではありませ  
ん、その息子の「ウガヤフキア  
エズの命」や、孫の「五瀬命」  
も、スサノオ信仰などに塗り変  
えられています。つまり通称「日向三代」と呼  
ばれるこれらの神様たちは、明  
治政府にとことん嫌われていた  
のでしょうか？  
いったい、明治政府は、何を  
考えていたのでしょうか？『上記』が伝える  
もうひとつの古代史さて、代々豊後国の領主を務  
めてきた大友家。その家系に門

外不出として伝わる『上記』という古文書が存在することを告知でしょうか？

しかもこの古文書は「豊国文字」という神代文字で書かれていたため、最近まで誰も読むことができなかったのです。

そこには、とんでもないもうひとつの古代史が書かれていました。

つまり、要約しますと……

◆ニギの命は祖母山に天孫降臨した。

◆そこから北側に下り、大野川流域を中心に古代国家を作っていた。

◆その首都は「大分の宮」と呼ばれ、現在の植田タウンの付近にあった。

◆近くの霊山にはヤタの鏡が置かれ、ここに天照大神が祭られていた。

◆一方、竹田には「直入の宮」と「二上の大宮」があり、ここは信仰や文化の中心地だった。

◆そして、孫のウガヤフキアエズの命は、この地から日本全国を統一して、その治世は少なくとも74代以上続いた。

この古代国家は「ウガヤフキアエズ王朝」と呼ばれています。が、現在では実在しなかったとする説が有力となっています。いったいなぜ明治政府は、この古文書を封印し、全国各地の

神社から「日向三代」の神々の痕跡を消していったのでしょうか？ その答えはあえてここには書きませんが、ひとつだけいえることは、この豊玉姫をはじめとする「日向族」とは、現在まで続く「大和王朝」とは、お互いに対立する勢力であった可能性が高いということです。

興味のある方は、私の運営するサイトを覗いてみてください。『ウガヤフキアエズ王朝実在論』<http://ugayajindo.com/> 最後にもう一度強調しておきます。

実は、日本百名山の祖母山こそ本当の天孫降臨の地であり、竹田こそ日本文明発祥の聖地であり、それをもたらししたのは豊玉姫を中心とする「日向三代」の神々だったのです。(あくまでも『上記』の記述が正しいとすれば……ですが)

だから私たち竹田市出身者は、消えかけた古代史の真実を探索して、後世に伝えてゆく義務があります。

神原地区にある神社は、私たちの祖先が残した「謎解きのヒント」なのかもしれません。

※もし、詳しい情報をお持ちの方がいらしたら、ぜひメール([fuji@fuji-shima.jp](mailto:fuji@fuji-shima.jp))までお知らせください。



## もうひとつの 白洲次郎 続編

萩町史談会会長 後藤 文雄

平成二十一年春、NHKのドラマ「白洲次郎」の中で、父文平さんが晩年過ごされた萩町桑木の山中で、亡くなるシーンが数分間放映されました。その画面に大きく「大分県直入郡萩町」の文字が表示された。すると、翌日から萩中央公民館に問い合わせの電話が殺到したと聞いた。

白洲文平、明治二年(一八六九)生まれ。明治学院大卒、ハーバード、ボン大学留学。のちに貿易会社「白洲商会」を創業、巨万の富を築く。豪放・放漫な性格。周囲からは、「白洲將軍」と畏敬された。建築が趣味。

昭和三年、白洲商会は、昭和金融恐慌で倒産、現在の竹田市萩町桑木に洋館を建て移り住んだとある。

前記ドラマの主人公次郎は息子で、戦後新日本国憲法制定にもかかわった。吉田茂外相(のち首相)の側近として、進駐してきたマッカーサーに対等に接し、GHQに「従順ならざる唯一の日本人」と言われた外交官。

では、どうして文平さんが萩町に住み着いたか。話によると萩村のある村議が、北九州の町で偶然に出会い意気投合した。萩村の風土や環境の話になり、

村議は夏は冷涼で広大な耕地や山林があると話し、中でも鶉が多いという話が気に入り来るようになったようだ。

金も暇も十分な隠居生活、狩猟にも興味があったのだろう。

昭和三十年代まで萩町の田畑の畦元には鶉がいた。冬、稲刈り後の畦元を歩くと足元から、唸るような大きな羽音を発して飛び立ち、一メートルの高さを水平に数十メートル飛んでゆく、味の良い鳥だった。その後の機械化で、手刈りの時のような落ち穂がなく冬期の田畑も耕起され、餌がなくなったのか今は野生の鶉は全く見かけない。

文平さんは、萩に着くと洒落た洋館を建てた。残された写真では、暖炉の前にくつろぐ姿も見える。近くの小川からポンプで水を汲み上げての水洗トイレ。ベッドの下には棺桶が置かれていたのは有名。狩用の馬も数頭飼われ、近所の男達が馬の世話をしたり、狩りの時、馬上から銃を撃つ文平さんの手伝いをして獲物は貰い本人は食べなかったとも。文平さんは、近所の女達が身の回りの世話をしていたという。

昭和十年(一九三五)、文平

さんは六十六歳で亡くなっています。亡骸は、黒塗りの車が来て引き取られた。村人は、初めて見る車に驚いたという。

私は、文平さんが亡くなった昭和十年生まれで、文平さんのことは知らない。戦後の少年時代、桑木の親戚の家に遊びに行くと、よく屋敷を見に行った。ガラス窓の縁は白いペンキが塗られた洋風の建物に驚き、村人は、「鼻高さんの家」と呼んでいた。

私は、鼻の高い金髪の外人が住んでいたと思いこんでいた。祖父や父は、知っていたと思うが、偉大な人がいたことを知っていたか定かではない。

文平さんの亡き後は、向井さん家族が住まれた。妹が向井さん宅の子供と同級生であったので、よく遊びに行き「赤いレングスの家だった」と話してくれた。

平成になって向井さんは、跡地に住居を新築したが、当時の馬屋の一部は今も残っている。

一昨年、向井さん宅に文平さんの曾孫になる白洲信哉さんが訪れた。私は、子供の頃眺めた住居や古老から聞いた話などを伝えたが、十分な対応はできなかった。

その折に、屋根の上に立てられていたという立派な避雷針を見せていただいたが私は覚えていなかった。